論　文

清水幾太郎における「現実関与の論理」の形成

庄　司　武　史*

はじめに

戦前・戦後をとおして，日本を代表する知識人の一人として活躍した清水幾太郎[1]の思想には，社会や現実に対して積極的に関与していこうとする論理がはたらいている。清水の思想的生涯を議論する上で，この点に関する検討は避けられない重要さを有するものと思われる。なぜなら，清水は知識人として，社会や現実への積極的な関与を社会学的に，あるいは思想的に終生，説き続けたばかりでなく，戦前・戦後いずれにおいても，自ら社会や現実に関与することで，社会や現実を構成する一員としての役割を果たし，あるいは必要に応じてその改善を図ろうとする行動をしばしばとっているためである。つまり，社会や現実への積極的な関与というべき論理は，清水の思想および行動を通底するキー概念のひとつと考えられる。清水の場合，往々にして，学問的な活動よりも実際的な行動の方がクローズアップされがちであったが，そうした行動を基礎づけている思想そのものの由来や機能，課題などについても，検討・位置付けが試みられる必要があるものと思われる。

本稿では，こうした試みの一環として，清水におけるジョン・デューイおよびプラグマティズムの思想の受容について焦点をあてる。

清水の長い思想的生涯のなかで，清水によってとくに注目され，たびたび論じられた主な思想家としては，デューイのほかに，ゲオルグ・ジンメル，オーギュスト・コント，ジャン＝ポール・サルトル，カール・シュミット，ジャンバッティスタ・ヴィーコらを挙げることができるだろう。このなかから，とくにデューイを取り上げるのは，清水における社会や現実への積極的な関与というべき論理の形成において，デューイおよびプラグマティズムの思想の受容が，そうした論理の下地となる清水の社会・個人観に与えた影響の大きさは，決して小さくないからである。

デューイおよびプラグマティズムの思想が清水の社会学や思想に与えた影響については，清水自身がたびたび振り返っているほか[2]，これまでの清水研究においてもしばしば触れられてきた[3]。しかしながら，それらの言及によって清水がある種のプラグマティストであったことは判明しても，清水のプラグマティズムと呼ばれるものがどのような思想であったのかについ

＊早稲田大学大学院社会科学研究科　博士後期課程１年（指導教員　古賀勝次郎）

ては，必ずしも十分に理解できたわけではなかった。本稿では，これまでの清水研究における不足を補い，清水が受容したデューイおよびプラグマティズムの思想が，それ以後の清水の思想においてどのようなものとして結実したのかを検討する。このことはまた，清水の思想および行動を通底するキー概念のひとつを検討することでもある。

1．デューイの思想との出会い

清水は後年，デューイの思想との出会いを「一つの転機」と呼んでいるが［清水 1986＝著作集18: 418］，その「転機」はいつ訪れたのであろうか。

デューイの名前やプラグマティズムの概略を，清水は植田清次（当時，理想社勤務，後に早稲田大学教授。1902-63）から得ている。それがいつの頃の話しかは判然としないが，清水の自伝等に基づけば，清水が植田と知り合い，その植田の勧めで実質的な処女作である『社会学批判序説』を出版した1933年頃のことと思われる。しかし，このときの清水は，デューイにもプラグマティズムにもあまり興味がわかなかったようで，植田の熱心な説明をいつも聞き流していたという［清水 1975＝著作集14: 288］。

清水自身がその魅力に気付くきっかけとなったのは，それから間もない1935年夏頃から始まった，刀江書院の雑誌『児童』や『子供の問題全集』への原稿執筆であった。清水は当時，無職で(4)，堀秀彦（当時，同社編集部勤務，後に東洋大学学長。1902-87）の勧めでこの仕事を引き受けている。

清水はこの仕事のために，子供の問題に関する先行研究が多いアメリカの文献を読み始めた。そして，このことがきっかけで，清水は子供の問題を支えている，アメリカの生物学，発達心理学，社会心理学，社会学，文化人類学など豊富な学問的蓄積を知り，大きな衝撃を受けるとともに強い関心を抱くようになる。清水が後に「私の聖書」［清水 1949＝著作集６: 442］と呼び，清水におけるデューイおよびプラグマティズムの受容の上で重要なきっかけとなった，デューイの『人間性と行為』（“*Human Nature and Conduct*”，1922）と出会ったのも1935年のことである。

清水がアメリカの学問的雰囲気に触れ，その蓄積に強い関心を抱くことになったのは，第１に，これが人間を環境に生きる無力な有機体のひとつとして捉えていたからであり，第２に，したがって常に環境と関係を結んで生きていく，あるいは自己を形成していかなければならない存在として捉えていたからである。

この経験の以前に清水が親しんでいたのは，ジンメルをはじめとするドイツ系統の社会学や哲学，コントの綜合社会学やマルクス主義である。清水はこれらのうち，とくにコントやマルクス主義から得られた示唆をもとに，すでにいくつかの論考や，『社会学批判序説』といった著作を著していたが，綜合社会学や階級闘争史観のような壮大な歴史哲学に対して，次第に冷めた眼を向けるようになっていた。上記『社会学批判序説』は，清水が東京帝国大学に提出した卒業論文を中心として成ったものであるが，清水はこのなかで，マルクス主義の立場からコントの綜合社会学の批判を企てている。が，清水自身はこうした自らの議論に不満で，コントの社会学成立に至るまでの社会史・思想史

の発展を再確認するという作業を始めていた。この成果はやがて『社会と個人――社会学成立史――上巻』（1935年）としてまとめられるが，こうした作業をとおして，清水の歴史哲学は，人類の歴史は社会と個人との闘争の歴史である，という見方に移っていった［清水 1975＝著作集14: 277］。清水はこのような見方を採用するなかで，社会における個人の地位を再確認し，個人の擁護を図ろうとする。それには社会と個人の闘争の歴史を確認するなかで，社会が個人をどう捉え，一方で個人は何のために社会を構成するのか，両者の関係を捉えなおさなければならない。上記の『社会と個人――社会学成立史――上巻』は，そうした清水の試みの一環であった(5)。清水がアメリカの学問の雰囲気に触れたのは，このように社会と個人との関係を強く意識している折りだったのである。このとき，清水が触れたアメリカの学問は，ドイツ系統の社会学や哲学が説く理性的で完結した存在としての人間ではなく，環境との交渉をとおして生きていく無力な有機体としての人間という見方を清水に教えた。その人間は無力である代わりに，むしろその故に，環境との交渉をとおして自らが形成されていくと同時に，自らが生きやすいように環境そのものを形成していく人間であった。そこに清水は，これまで蓄積してきた学問にはない，人間の主体性や自由の片鱗を垣間みたのである。「久しく親しんで来たドイツの学問などに比べると，ここには，自由がある，生命がある，人間がいる」と清水は述べている［清水 1959＝1970: 151］。

こうしてアメリカの学問のなかに入っていった清水は，デューイのほか，ジョージ・ハーバード・ミードやキンボール・ヤングの著作を次々に読み，間もなくデューイおよびプラグマティズムの思想に強く共鳴していった。当時の清水の心境である。

> 「私はこういう書物から一々の事実や知識を得たのではない。全体を貫く原理や態度によって驚き且つ救われたのである。（中略）それは社会学成立の問題のために読んだ何十冊の書物のように，ただ私の外に横たわっていて，私の自由になる材料というのではなく，却って私自身に衝撃を与え，私自身に食い入り，私自身を作り直し，私自身に化するところの書物であった」［清水 1949＝著作集 6 : 442］

この回想は，清水が戦後間もない1949年に著した最初の自伝『私の読書と人生』のなかの一文である。清水がデューイやプラグマティズムに出会ってから15年あまり後に振り返った心境であるが，清水にとってそれは，ただの衝撃と感動ではなく，清水の内面の再構成を促すほどの出来事だったことが分かる。「私自身」という言葉が繰り返し使われているところからも，それはうかがえよう。デューイおよびプラグマティズムとの出会いは，清水にとって，まさに「転機」となったのである。

2．清水のデューイ理解

では，清水はデューイおよびプラグマティズムの思想の何に強く共鳴し，受容したのであろうか。そして，それによって清水の思想はどのように変化したのであろうか。本章ではこのあたりの事情を，清水が実際に取り上げたデューイの著作とその理解に基づいて検討する。

すでに触れたように，清水にはデューイおよびプラグマティズムに関する著作・論考等のほか，それらを取り入れた業績が多数ある。そこ

で清水が取り上げたデューイの著作や論考の種類は幅広く，かつテーマや時代に応じた変化がみられるが，それらに左右されず，多くの場面で取り上げられ，触れられているものもいくつか存在する。すなわち，清水の「聖書」であった『人間性と行為』のほか，「哲学復興の必要性」（“The Need for a Recovery of Philosophy”, 1917），「哲学の再構成」（“Reconstruction in Philosophy”, 1920），『共同の信仰』（“*A Common Faith*”, 1934），「自由主義と社会行動」（“Liberalism and Social Action”, 1935）である[(6)]。

これらを利用しつつ，清水が戦前から戦中，戦後を一貫して説いたのは，社会によって作られると同時に，社会を作る存在としての人間の可能性であった。

『人間性と行為』においてデューイは，現実における問題を解決するためには，人間の心に働きかけるだけではなく，人間が生きる環境そのものを変えていく必要があることを強く訴える［Dewey 1922（河村訳 1995: 34, 40-41）］。すでにデューイは1917年の「哲学復興の必要性」において，生活とは周辺環境の諸々の変化を改変すること，すなわち自らに不利な出来事を中和し，中立的な出来事を自己に協力的な要素やまったく新しい姿に改変することであると述べている［Dewey 1917: 9］。その上で，「経験とは，本来，知識ではなくして，為し，かつ受ける方法である」と述べ［*Ibid.*: 37］，環境から影響を受ける人間にとどまらず，環境への働きを為す人間の在り方が示唆されている。これは『共同の信仰』においてさらに強調され，「われわれの存在のさまざまな要素の間には構成と調和が存在し，（中略）われわれとの関係において配置され，設定されるのである」と述べられる［Dewey 1934（河村訳 2002: 190）］。このように自ら環境に働きかけ，変えていこうとする意思は，習慣（habit）によって与えられる。デューイはその意思を知性（intelligence）と呼ぶが，知性は決して環境の批判に終始するものではない。また，暴力的な方法を是認するものでもない。「自由主義と社会行動」においてさらに強く主張されたように，知性とは，批判的活動をさらに構成的な活動へと高め移すことを含意し，かつ暴力的な方法を否定するものなのである［Dewey 1935（河村訳 2002: 325-328）］[(7)]。

ただ，人間のこうした活動が実現するためには，環境の側に，人間の意思の働きかけが可能となる余地が残されている必要がある。これに対してデューイは『人間性と行為』で次のように述べている。すなわち，「人間社会はつねに更新の過程であり，更新があるが故に存続する」，あるいは「社会生命はあまりに固定的で組織化されているというよりも，むしろ混沌として未組織であるように見える」として，環境や社会の側の未完成性を強調するのである［Dewey 1922（河村訳 1995: 101, 131）］。しかし，そうした未完成性の故にこそ，そこに人間の意思を働かせる余地があるとデューイはみた。「世界が不確定なものであるとすれば，そのような世界は意思が自由な世界である」とデューイはいっている［*Ibid.*: 295-296］。デューイにおいて環境は，固定的なものではなく，プラスティックな，可塑的なものなのである。

清水はデューイおよびプラグマティズムに出会った頃，habitや習慣という文字をみつけるたびにある種の昂奮を覚えたというが［清水 1975＝著作集14: 288］，それはデューイが説

くそれらの言葉に，社会を作る存在としての人間の可能性をみていたからである。しかも，そこで前提とされている社会は，清水を現に取り巻いている「硬い」現実とは根本的に異なる。1930年代という現実は，やがて訪れる1940年代の破局のはじまりに向けて動き出しており，そこでは，国家や社会，民族といった側面がより強く打ち出され，社会における個人や自由の発言権が逐次，失われつつあった。こうした「硬い」現実のなかでは思いもよらなかった社会の可塑性と，そこにおいて社会を作る個人の可能性をデューイは説いていたのである。そして，こうしたデューイのプラグマティズムを知った直後の清水もまた，「それ（社会的環境: 筆者注）は何等か堅いものであるよりも軟いものであるように見え，固定的なものであるよりも浮動的なものである如く見える」と述べ［清水 1937b＝著作集 2 : 169］，人間の行動のひとつひとつが，そうした社会的環境を形づくり，支え，変じていくことを説くに至るのである。

可塑的な社会のなかで，個人は社会によって作られるとともに社会を作るものである，というデューイおよびプラグマティズムに裏打ちされた清水の社会・個人観はこうして形成された。清水が後に，プラグマティズムが哲学・思想の歴史でどのような位置付けにあるか，あるいは他の哲学や思想家とどのような関連にあるかにはまったく関心がなかったと述べているように［清水，上山 1968: 3］，清水にとってプラグマティズムは学説や知識ではなく，人間が社会や現実に関わっていくための手段もしくは論理として把握されていたのである。

やがて清水はこうした社会・個人観を，西田幾多郎から示唆を得た「クレアタ・エト・クレアンス（creata et creans）」（造られ，かつ造る）というラテン語で表していく[(8)]。その初出は1936年12月に清水が発表した「悪に就いて」であるが[(9)]，以後，清水は個人主義や自由主義が排撃された戦中にあっても「現実の再建」（1943年）などで，そして終戦後は「デモクラシーの哲学」（1945年）や「プラグマティズム概論」「ヒューマニズムの性格」（ともに1947年）などにおいてこうした社会・個人観を主張し続けていく。このとき清水が，上記の社会・個人観と関連するかたちで説き続けたのは，「如何なる場合にも人間は現実を眺める観客ではなく，舞台に上って何等かの役割を果たしている」［清水 1943＝著作集 6 : 336］という姿勢であった。そして，こうした姿勢を説いた清水は，間もなく現実において，その履行を試されることとなる。以後の清水の生涯において，行動的知識人と呼ばれた一面の顕現である。次章ではこの点を検討する。

3．「現実関与の論理」の形成

「悪になにも注意しないという形をとる，悪にたいする無抵抗は，悪を押し進める道である。悪から超然とすることで，自分自身の良心を錆びないように保ちたいという個人の欲望は，かえって悪を引き起こし，こうして，悪に対する個人的責任を生みだすのである」［Dewey 1922（河村訳 1995: 30）］

デューイは，清水の「聖書」であった『人間性と行為』において，このように述べたことがある。

これまで述べてきたように，デューイおよびプラグマティズムの思想は，清水において，可塑的な社会のなかで，個人は社会によって作られるとともに社会を作るものである，という社

会・個人観として受容された。そして，清水においてこれは，みずから社会や現実に関与することで，社会や現実を構成する一員としての役割を果たし，あるいは必要に応じてその改善を図ろうとする行動につながっていったことは，この後の清水の生涯から明らかである。デューイおよびプラグマティズムを受容することで形成された社会・個人観に基づく，このような清水の行動の論理を，ここでは「現実関与の論理」と呼びたい。

こうした清水の「現実関与の論理」が，現実において問われたひとつの典型とみられるのは，清水が首相近衛文麿の国策研究機関である昭和研究会[10]に参加したことである。1938年夏，清水は三木清の要請を受けて，昭和研究会の一部門である文化研究会に加わった。清水がデューイおよびプラグマティズムを受容して間もない前年の1937年７月には，日中戦争が開始されていた。このとき三木は，昭和研究会事務局の要請で，拡大しつつある日中戦争を世界史的に意義付ける思想原理を作り出すという作業を任されていた（これは1939年１月の「新日本の思想原理」および同年９月の「新日本の思想原理　続篇――協同主義の哲学的基礎」としてまとめられる）。清水は三枝博音，林達夫，笠信太郎，舩山信一らとともに，この研究・討議に参加したほか，総合雑誌を中心に，しばしば時局を論じた論考を発表している。

しかし，昭和研究会が近衛という政治家を求心力とした国策研究機関である以上，そこに関与するということは，意図的にであれ，結果的にであれ，当時の日本が国家の水準で進める政策の一端に関わることを意味する。1930年代において，国家や社会の存在感が増すなか，個人主義や自由主義の発言権が失われていった状況についてはすでに触れたが，このような状況下で沈黙する知識人もいたなか，なぜ清水は昭和研究会に加わり，発言を続ける道を選んだのか。

この間の事情を説明した文章として，おそらく最も早いのは，終戦直後の1945年11月に清水が発表した「三木清」という追悼文である（三木はこの９月に獄死した）。清水はこのなかで，自分や三木が昭和研究会に加わった所以を，「既に開始され，また進行している事態の中に立ちながらも，それを出来るだけ望ましい方向へ振り向けようと考えた」といい，それを支えた精神について，「どうして現実を固定的に考える必要があるのか。現実は吾々自身の努力や絶望をも一つの要素として含むという意味でプラスティックなものではないか」と振り返った［清水　1945: 196］。いうまでもなく，ここにはデューイおよびプラグマティズムから得た可塑性の概念の影響が顕著である。現実を決定されたものとみず，それに関与することで現実の改変を試みて昭和研究会に参加したという清水の行動は，清水における「現実関与の論理」に基づくものとして捉えることができるであろう。

ただ一方で，現実に超然としない，こうした関与という在り方が，知識人の時局迎合の一例として批判されてきたこともたしかである[11]。この問題に踏み入ることは本稿での議論の範疇を超えるが，清水は戦前においてすでに，知識人が何かを書くとき，必ず時局を弁明し，国策の大義を信じていることを強調して書き添える不毛を説いているから［清水　1940＝著作集４：123-124］，現実への関与が時局迎合と捉えられる危険と表裏であることは認識していたものと

思われる。それでも現実への関与を清水が選択したとき，清水の「聖書」は本章の冒頭に掲げた言葉を教えていた。しかし，ここではさしあたり，清水の行動が「現実関与の論理」に基づくものであったことを指摘できれば十分である。

終戦後，清水が最初に著した社会学の単著は『社会学講義』（1948年）であるが，これは清水の「現実関与の論理」に一定のかたちを与えた業績とみることも可能である。ここで，清水はさらに進んで，集団によって作られた人間が，逆に集団を作るような集団を「近代的集団」とし，政党にその典型を求めた［清水　1948＝著作集７：208以下，255以下，301以下］。与えられた環境や現実に満足せず，自らの意思でそれを変えていこうとするひとつの在り方として，清水が政治に注目していたことは興味深い。清水自身は，やがてはじまる基地闘争や平和運動に関与していくが，こうした運動の性格からいっても，その過程において多くの政党や政治集団と関わることとなった。清水がそこで得た経験は，清水が『社会学講義』で説いた理想とは必ずしも一致せず，むしろ政党と群衆が溶け込んでしまうという懸念［*Ibid.*: 302-307］の方が現実となったことを目の当たりにした。しかし，政党を典型とした「近代的集団」という在り方そのものは，清水が運動から身を引いた後も追求していた様子がうかがわれる(12)。「現実関与の論理」は，戦前から戦後をとおして，清水の思想や行動のある根本的な部分を支え続けたということができるのである。

以上，清水がデューイおよびプラグマティズムの思想を「クレアタ・エト・クレアンス」という社会・個人観として受容するとともに，「現実関与の論理」として形成していった過程を追ってきた。

ところで，すでに簡単に触れたとおり，清水には，デューイおよびプラグマティズムの受容以前に親しんできたジンメルやコントといった学問的蓄積がある。それらの蓄積はこの過程において，どのような役割を果たしたのであろうか。清水には，「一冊ずつ買っているうちに，何時か著作の全部或いは殆ど全部が揃ってしまった」という思想家が何人かおり［清水 1975＝著作集14: 187-188］，デューイはもちろん，ジンメルやコントもここに含まれている。清水にとって彼らの著作は，人生の折々において読まれ，多くの影響を与えられた重要な存在であった。その意味でも，デューイおよびプラグマティズムの受容にあたって，ジンメルやコントが果たした役割は小さくないものと思われる。以下では，さらにこの点に検討を加え，プラグマティズムを含む清水の思想形成過程を，より重層的に把握しておきたい。

４．デューイ受容とジンメル

上で挙げたジンメル，コント，デューイのなかで，清水の思想的生涯に最初のある痕跡を残したのはジンメルが最も早かった。先ず，ジンメルについてみてみよう。

清水がジンメルを知り，関心を寄せていったのは，おそらく中学と高等学校でドイツ語を学んでいたという偶然のためである(13)。清水は中学のときに社会学という学問を知り，社会学を自らの進むべき道と定めた。中学修了後，1925年から1928年までの３年間を東京高等学校で過ごす間，清水はドイツ系統の社会学や哲学の文献を原書で多数読んでいる。当時，とくに

関心を寄せていたのが，形式社会学とそこで出会ったジンメルの社会学であった。清水は後にジンメルの諸著作について「今日まで私の愛読書になっている唯一のもの」［清水 1949＝著作集 6 : 412］と述べ，とりわけ『歴史哲学の諸問題』（“*Die Probleme der Geschichtsphilosophie*”, 1892）が強い印象を残している。こうしたドイツ系統の社会学への接近は，大学入学後もしばらく続くことになる。

しかし，清水は当時のジンメルへの傾倒を，「半ば文学的な興味」と振り返っている［清水 1978＝著作集18: 16］。なぜなら，清水は高等学校を卒業する頃には，すでに形式社会学への興味を失いつつあったからである。ジンメルそのひとへの興味は失っていない。個別に対してよりも，全体への興味の方を先に失ったのである。

清水が形式社会学から離れていったのは，清水が「（ドイツ社会学の: 筆者注）非現実性というか，如何にも浮世離れしているのを不満に感じるようになった」［*Ibid.*: 16］と振り返っているとおり，形式社会学特有の抽象性や歴史に対する超越的な態度に不満が募っていったためである。周知のように，形式社会学は19世紀のドイツで生まれたものであるが，それはコントにはじまる綜合社会学とは対照的に，政治や経済などさまざまな人間活動を社会現象たらしめる社会的な相互関係である「形式」［Simmel 1917（清水訳 1979: 68）］の心理学的分析を務めと任じていたため，はじめから抽象性の高い社会学となることは免れ得ないことであった。

ドイツ系統の社会学から離れはじめた清水は，やがてコントの綜合社会学やマルクス主義に向かうのであるが，それでも清水は，人間の心理の側面から社会現象に接近しようとするジンメルの仕事そのものには，最後まで関心を失わなかった。「形式社会学などとの関係からでなく，（中略）人間の心理に対する鋭い洞察，これを処理して行く確実な論理」に惹かれていたのである［清水 1949＝著作集 6 : 424］。これに関連して注意しておく必要があるのは，さきに挙げた『歴史哲学の諸問題』である。清水は同書を「リアリズム批判という点で，当時から今日まで，私の大切な教科書である」と述べている［清水 1975＝著作集14: 210］。それはなぜか。

清水がジンメルとの関連でリアリズム批判というとき，それは物事を「あるがまま」に認識することの拒否を意味している。ジンメルが『歴史哲学の諸問題』で述べたところでは，「認識一般が出来事の『実際にあったとおりの』コピーではありえず，（中略）認識は生きられた現実のひとつの改造である」［Simmel 1892（生松・亀尾訳 1977: 97）］となる。ジンメルは物事の認識をコピー，すなわち「模写」ではなく，人間の側の精神的能動性によって作りあげる，あるいはまとめ直すといった「構成」として理解しているのである［*Ibid.*: 73］。こうした認識論は，歴史的真理の問題にも適用される。「歴史的真理とはたんなる再現ではなくてひとつの精神的能動性である。この能動性はその素材――これは内的な模写物として与えられる――から，まだそれでない或るものを作り出す」［*Ibid.*: 73］。無論，ここで歴史における精神的能動性を問われているのは人間である。

清水もまた，こうしたジンメルの思想を「精神は，大きな混沌としての現実に向って立ち，これに自らの形式によって秩序を作り出して行

く」［清水 1975＝著作集14: 210］と捉えており，この点がまさに，清水がジンメルに惹かれ続けた所以となっている。形式社会学の抽象性や歴史に対する超越的な姿勢に不満が募っていた清水にとって，こうしたジンメルの姿勢は「英雄的なドラマのように見えた」という［*Ibid.*: 210］。

デューイが「構成」という概念をドイツ観念論から学んで用いている可能性についてはすでに指摘したとおりだが，ジンメルおよび清水におけるこのような認識論は，これまでみてきたデューイおよびプラグマティズムのものとかなり近い。この意味で，ジンメルはアメリカの哲学や社会学と似たベクトルを持っていたといえる。清水がデューイおよびプラグマティズムに出会うのは，このおよそ10年後のことであるが，清水においてデューイおよびプラグマティズムの思想を受容する素養は，ジンメルに対する関心と理解のなかに，すでにみることができるのである。

5．デューイ受容とコント

清水の思想的生涯をみる上で，コントもまた，重要な存在である。

後に触れるように，清水はコントの学説を扱った卒業論文で東京帝国大学を卒業したが，この一部が，松本潤一郎や谷川徹三の計らいで岩波書店の雑誌『思想』に掲載され（1931年８月第111号），清水が論壇にデビューするきっかけとなったからである。また，清水がその後も著作や論考のなかでたびたびコントに言及していること，清水が1969年に，当時，勤めていた学習院大学を退官する際に行った最終講義がコントに関するものであったこと，そして大学卒業から45年以上が経過した1978年になってなお，『オーギュスト・コント―社会学とは何か』（岩波新書）を著したことなども周知の事柄に属しており，清水の思想的生涯におけるコントの重要性がうかがえよう。

清水は高等学校卒業後，東京帝国大学文学部に入学し，家族社会学の権威である戸田貞三のもとで社会学を学びはじめた。清水が東京帝国大学の学生であったのは1928年から1931年までの３年間であるが，コントの社会学に注目したのはその最後の時期にあたる。それまで清水は，引き続きドイツ系統の社会学や哲学の文献を読み続ける一方，マルクス主義に関連する文献も多数，読んでいる。

清水は，卒業論文の作成を控えたある時期に，コントの綜合社会学を卒業論文のテーマにすることを思い立ったといい，そのきっかけは，清水自身の回想に基づく限り，これも偶然ともひらめきともいえるようなものである。清水自身は後に，このときのきっかけを３点に整理しているが［清水 1970＝著作集18: 224-226］，ここではさしあたり，このうちの第１点が重要である。

すなわち，コント以後，社会科学の発展のなかで経済学や政治学が科学の一分野として体裁を整えて独立し，それら一切を包括していたはずの綜合社会学から研究分野が次第に失われていくこととなった。コントからジンメルに至る社会学の歴史が自らの存立意義を探し求める運動であったこと，そしてコントの綜合社会学は批判され，乗り越えられるべき過去の社会学という評価が定着したことは周知のとおりである。科学としての体裁を整えようとした社会学は，たとえば形式社会学にみられるように，抽

象性を増し，歴史に対する超然とした姿勢が強まることとなった。それで科学としての社会学の存立意義は見出せたかもしれなかったが，反面，具体的な人間や時代の問題への関心という視点が切り捨てられることとなった。清水がドイツ系統の社会学や哲学に抱いた不満が，この点に由来していたことは，すでにみたとおりである。コントの綜合社会学に回帰することで，それら後代の社会学が切り捨ててきた「社会学の生命」［*Ibid.*: 225］といったものへの示唆を，清水は期待したのである(14)。

そして，このとき，清水の刺激になっていたのが三木清の存在であった。三木が雑誌『新興科学の旗の下に』を発行したのは，清水が大学に入学した1928年のことである。三木は，当時，マルクス主義を特別なものとみなさず，思想史の発展のなかに位置付けようとすると同時に，マルクス主義が説く歴史的必然にともすれば埋没しそうになる，人間の主体的役割を強く訴えるヒューマニズムを説いていた。清水もまた，こうした三木の活動に刺激されて「哲学的人間学」を説くマックス・シェーラーに触れ，感動を受けている。シェーラーはコントの学説を批判したことでも有名であるが，清水が後に「マックス・シェーラーに導かれて，私はコントの前へ連れ出されたのではないか」とも振り返っているように［清水　1975＝著作集14: 249］，清水はこうした刺激も吸収しつつ，コント研究に取り組んでいく。この顛末の一部は第１章で触れたとおりである。

ジンメルの形式社会学からコントの綜合社会学へという清水の関心の流れは，社会学史上では一般に逆の流れであるし，両者の社会学の対象という側面からみると，個人への視点から社会への視点という流れにみえる。しかし，このとき清水がみていたのは，そうした歴史や社会における人間の役割であった。清水が受け止めたジンメルの社会学はたしかに人間をみていたが，社会や歴史といった通時的・共時的な側面からみた人間の役割への視点に欠けていた。一方，コントの社会学は，社会や歴史についての視点は壮大であるが，そのなかにおける人間の存在感が希薄である。このとき，両者のいわば橋渡し役を果たしたのが，デューイおよびプラグマティズムの思想であったといえる。その過程で，清水における人間は，社会的・歴史的な存在として，むしろ具体性を増していくのである。

以上を踏まえた上で，デューイおよびプラグマティズム受容との関連で注目したいのは，清水がデューイおよびプラグマティズムを受容した直後の1937年に書いた「歴史に就いて」（同年に編まれた『人間の世界』に収録）である。

清水が社会と個人の関係を意識するなかで取り組んだのが1935年の『社会と個人』であったことは，すでに述べたとおりである。そこで清水は，コントを，歴史というものを知らなかった18世紀の精神と，歴史の世紀であった19世紀の精神との矛盾と格闘し，しかもその結果，19世紀の精神が勝った思想家として捉えていた。が，同書においては，ここからホッブズの『市民論』や『人間論』の議論に進む都合上，コントについては一旦，議論が止められている［清水　1935＝著作集１: 472］。

「歴史に就いて」において，この点は改めて議論し直されているが，ここでは上記の２つの精神の問題が，ルネサンス以後の人間性と歴史の問題として捉え直されている点に注意が必要

である。清水によれば，ルネサンス以後の人間は，構成的な働きを為すことを原理とするものである。しかるに，コントにおいて勝っていた19世紀の歴史の精神は，歴史を人間から出発させるのではなく，人間とは別個のものとして出発させる。したがって，「コントに於ける人間はこのように社会乃至その運動としての歴史を造る人間ではなくして却ってこれに依って造られる人間でなければならぬ」［清水　1937a＝著作集1：301］と把握されることになる。

ここで清水はコントを，作られる人間観，いわばクレアタな人間観を説くものとして把握し，批判するのだが，興味深いのは，コントが説いた「過去―未来―現在」という「諸時間の哲学的順序」をも取り上げている点である。コントは，過去を踏まえ，未来を予見し，その謙虚な自覚のもとで現在の人間というものを把握すべきことを説いたのだが，清水は次のように解釈し直すのである。

> 「過去と未来との間に横たわる点としてコントが考えたものは生ける人間である。だがそれは点に比せられるべきものではない。（中略）人間は過去に依って造られるにしても尚且つ未来を造る存在である」［*Ibid.*: 302］

当初，「クレアタ・エト・クレアンス」で意味されたところのものは，社会によって作られる人間は，その一方で社会をも作るという共時的な社会・個人観であったが，ここではさらに，過去によって作られ，かつ未来を作るという通時的な視点が加わっていて大変，興味深い。こうした清水のコント批判および解釈が妥当かどうかは別に検討すべき問題であるとして，重要と思われるのは，デューイおよびプラグマティズムから得た知見を活かしてコントを批判するという清水の取り組みそのものと思われる。コントが清水の思想において占める大きさの一端は上でみてきたとおりであるが，デューイおよびプラグマティズムの受容は，清水が思い入れを持っていたコント解釈にも，批判・再考を強いることを避け得なかったのである。しかし，こうした取り組みが，清水のコント解釈に一定の成熟をもたらしたともいえるのである。

結　び

以上，本稿では，清水がデューイおよびプラグマティズムの思想を「クレアタ・エト・クレアンス」という社会・個人観として受容するとともに，「現実関与の論理」として形成していった過程を追い，併せてそうした清水の思想形成に一定の役割を果たした，清水のジンメルおよびコント理解について検討してきた。

最後に，このような論理を考えた上で想定される，清水の思想理解の展望を示しておきたい。

結論を先にいえば，清水におけるデューイおよびプラグマティズムの受容と，「現実関与の論理」というべき論理の形成を念頭に置くことによって，清水の思想的生涯の捉え直しに資する視点のひとつを見出すことができるように思われる。それは，上記のような清水の思想形成を分水嶺として顕在化する，現実や社会における人間の主体性，あるいは歴史における人間の役割を強く意識する，清水の思想におけるヒューマニスティックな側面である。

清水は高橋徹とのある対談において，大学時代に自覚して，それ以降も意識し続けた自らの

関心について次のように振り返ったことがある。

「一つは，歴史哲学，つまり歴史への関心です。（中略）現代的関心と言いかえても，そう間違いないと思います。もう一つは，歴史によって作られ，歴史を作っていくはずの，しかも弱い人間――そういう人間への関心」［清水，高橋 1970: 2］

歴史や現代の社会，そして人間への関心は，いずれもヒューマニズムを構成する重要な要素である。本稿でみてきたように，このことは，清水におけるジンメル，コントおよびデューイへの関心のなかに明瞭に現れていたといってよいだろう。

冒頭で，清水が関心を示した思想家を何人か挙げたが，このうち本稿で取り上げたジンメル，コント，デューイを除く，サルトル，シュミット，ヴィーコらは，清水がデューイおよびプラグマティズムを受容し，「現実関与の論理」を形成して以降，関心を寄せていった思想家たちである。

サルトルの実存主義については，サルトル自身が実存主義について「人間の主体性から出発しなければならない」，あるいは「実存主義者はまた，人間がこの地上で，自分にいくべき道を教えてくれるようなある与えられた標識のなかに助けを見出しうるとも考えていない。彼は人間がこの標識を自分の好みのままにみずから解読するのだと考えるからである」と述べたことからもうかがえるように［Sartre 1946（伊吹訳 1955: 13, 30）］，社会における人間の主体性を意識する清水において親和性が高い思想であった。終戦直後，清水がサルトルに対して示した強い関心は，ここに由来しているものと思われる。また，清水が1970年代前後にとりわけ強い関心を寄せたヴィーコは，ルネサンス・ヒューマニストの末裔と位置付けられることもある。ヴィーコについては最近，ドイツ人文主義におけるアウエルバッハのヴィーコ解釈を取り上げ，その位置付けを論じた興味深い論考が発表されるなど[15]，ヒューマニズムとの関連にも再び，光が当てられつつある。こうした背景も，今後の清水研究に資するものとみられる。

古今，思想家にしてヒューマニストを自任しなかった者はいない，とは三木清の言葉であるが，本稿で検討してきたような清水の思想形成を踏まえ，清水の思想的生涯を再確認し，批判的に再検討するとき，おそらく「人間」と「現代」というものを思想の中心に据えた清水思想の展望が，新たに開けてくるように思われる。

なお，本稿では，主に清水の思想におけるデューイおよびプラグマティズムの受容と，「現実関与の論理」の形成に焦点をあてて議論してきたが，筆者はこれと併せて，清水における庶民・民衆への視点の形成も重要な視座のひとつと考えている。すなわち，現実関与の論理と庶民・民衆への視点の両方を把握することで，清水思想の全体像がより重層的に理解できるものと考えているので，後者については稿を改めて議論することとしたい。

〔投稿受理日2009. 11. 21／掲載決定日2009. 11. 24〕

注

(1) 清水幾太郎（1907-88）は東京生まれの社会学者，思想家。東京帝国大学文学部社会学科卒。戦前・戦中は主に在野で活発な評論活動を行ったほか，読売新聞社の論説委員も務めた。終戦後は丸山眞男，福田恆存らとともに戦後論壇の中心的知識人

の一人となり，平和運動やいわゆる六十年安保闘争でも際立った存在感を示した。本稿で取り上げたもの以外の主な著作として，『流言蜚語』（1937年），『社会的人間論』（1940年），『社会心理学』（1951年），『現代思想』（1966年），『倫理学ノート』（1972年）等。

⑵　本稿で取り上げるもの以外では，清水の回想として［清水　1949＝著作集６：440以下］や［清水　1975＝著作集14: 280以下］等が参考になる。清水によるデューイ研究としては，［清水　1946＝著作集６］が戦前から終戦直後までの業績の集大成といえる。戦後では，『現代思想』や『倫理学ノート』での言及にも注意する必要がある。また，本稿でも取り上げるように，清水はデューイの著作の翻訳もしばしば行っている。

⑶　清水のプラグマティズムに言及した先行研究としては［藤竹　1990］がとくに参考になる。［天野　1979］は清水の思想を戦前・戦後をとおして体系的に取り扱ったほとんど唯一の業績であるが，全体的にイデオロギーの側面から清水の思想を断罪する傾向にあり，清水のプラグマティズムについても一面的な評価にとどまっている。［小熊　2003］でも言及されているが，小熊の関心はむしろ清水の思想の庶民性の位置付けにあるので，言及は限定的である。なお，河村望は清水が引用したデューイやミードの誤訳を指摘し，日本におけるプラグマティズム受容過程の根本的問題の典型として批判している［河村　1990, 1992, 1995訳者あとがき，河村・石毛　1993］。

⑷　清水は1931年に東京帝国大学を卒業した後，社会学研究室主任の戸田貞三のもとで副手（助手は林恵海）を務めるが，1933年３月に免職となった。清水は当時，戸坂潤らが主催する唯物論研究会に加わっていたが，そこで発表したいくつかの論文で社会学批判を行ったことが原因であった。

⑸　なお，表題に「上巻」とあるように，同書は当初，上・中・下の３巻構成で出版される予定であったが，後にこの計画は放棄されたため，上巻のみの出版に終わった。なお，清水は中巻・下巻に収める予定の論考もいくつか著しており，その一部は『日本文化形態論』（1936年），『新しき人間』（1941年）などに収められたほか，戦後に編まれた論文集にもしばしば再録されている。

⑹　これら５つの著作・論考は1969年に刊行が始まったデューイの全集に収められている。この全集は発表順に初期著作集（Early Works: 1882-98年），中期著作集（Middle Works: 1899-1924年），後期著作集（Later Works: 1925-53年）という３つの時期区分から成るが，清水がとくに取り上げた５つの著作・論考がすべて中期ないし後期に属していることは興味深い。全集を編んだジョー・アン・ボイドストンによれば，これら時期区分は概ねデューイの伝記的特徴に拠っているとのことであるが［Boydston 1970: vii］，ドイツ観念論に傾倒して自らをヘーゲル主義者と位置付けた初期のデューイとは対照的に，ウィリアム・ジェームズやチャールズ・サンダース・パースらのプラグマティズムを受容して以降の中期および後期におけるデューイは，子供の教育や哲学，論理学および政治哲学など幅広い領域に関心を示している。清水はデューイの著作のほとんどを所有していたらしいが，清水の研究のなかで初期に属するデューイの業績がほとんど利用されていないことは，清水が，初期も含めたデューイ全体に対してよりも，中期および後期のデューイが説いたプラグマティズムの方に，より関心が高かったであろうことを示唆している。

⑺　デューイの伝記を書いたジョージ・ダイキューゼンは，デューイにみられるこうした構成的な要素を，ヘーゲル主義者を自任してドイツ観念論に傾倒していた初期の頃の学識の昇華とみているが［Dykhuizen 1973（三浦・石田訳　1977: 71）］，後で確認するように，似たような要素は新カント派哲学の影響もあったジンメル等の形式社会学にもみられる。

⑻　西田は「論理と生命」でこの言葉を使用している［西田　1936a＝全集８：32］。西田からの示唆については［清水，上山　1968: 4-5］を参照。なお，清水は西田哲学には終始，批判的であった。しかしながら，西田がこの「論理と生命」で説いたところや，三木清と行った対談［西田　1936b＝全集24: 132-133］での発言内容などからみると，西田が説くところの内容と清水のプラグマティズムとはかなり近い位置にあるようにも思われる。

⑼　清水の長女で，清水の著作集を編んだ哲学者の清水禮子（青山学院大学教授，1935-2006）の検討による［清水禮子　1992: 404］。

⑽　昭和研究会は近衛文麿の友人であった後藤隆之

助らによって1936年11月に設置された国策研究機関。清水が加わった1938年には５部門16研究会が設置されており，経済，外交，農業問題など幅広い分野で活発な研究が行われたが，1941年に大政翼賛会に合流するかたちで解散した。

⑾　清水に対する批判では［天野　1979］が典型。日本の知識人一般の問題については［北河　2003］も参照。

⑿　清水によれば，「少しでも国政に役立てば，と思って（中略）ある時期，野党の国会議員諸君と定期的に話し合っていたことがある」という［清水　1976＝著作集15: 308-309］。このあたりの背景については，［清水　1976＝著作集15: 285以下，304-305］等が参考になる。

⒀　清水が進学した独逸学協会学校中学（現在の独協学園）は，外国語の課目が英語ではなくドイツ語という珍しい学校であった。なお，このとき初めて習ったドイツ語にも，清水は特段，苦労した様子はなく，東京高等学校の入試も英語ではなくドイツ語で受験して，合格している。

⒁　なお，第２点はコントが生涯，市井の学者として多くの欠点も備えた「人間」であったことへの魅力，第３点はすでに過去の社会学とみなされていたコントの綜合社会学を，自分だけが研究するのだという虚栄心だったという。上記の背景については［清水　1949＝著作集６: 425以下］および［清水　1959＝1970: 99以下］がとくに参考になる。

⒂　アウエルバッハのヴィーコ解釈については［村井　2009］。また，ドイツ人文主義全体に関する批判的再検討は［斉藤　2009］が参考になる。これらは，『思想』2009年第７号の「ドイツ人文主義の諸相: 近代的学知の淵源を探って」という特集に寄せられたもので，こうした特集が組まれること自体，人文主義への関心が再び集まりつつあることを示しているように思われる。

参考文献

清水の主要著作・論文等は，以下の著作集に収められている。

清水禮子編，1992-93，『清水幾太郎著作集』，講談社.

本稿で取り上げた清水の著作・論文のうち，上記著作集に収められているものについては著作集から引用し，［初出＝著作集の巻号: ページ数］のように記載した。利用した著作・論文名は以下の一覧に記載している。なお，引用にあたって旧字・旧仮名遣い等は改めている。上記著作集に収められていない清水の著作・論文等については，所定の引用規則にしたがった。

天野恵一，1979，『危機のイデオローグ: 清水幾太郎批判』，批評社.

Boydston, Jo Ann., 1970, “Guide to the Works of John Dewey”, Edited by Jo Ann Boydston, Southern Illinois University Press.

Dewey, John., 1917, *The Need for a Recovery of Philosophy: Essays in the Pragmatic Attitude*., New York, Henry and Company.

———., 1922, *Human Nature and Conduct: An Introduction to Social Psychology*., Edited by Jo Ann Boydston, 1983, *John Dewey The Middle Works: 1899-1924*., vol. 14, Carbondale, Southern Illinois University Press.

———., 1934, *A Common Faith*., Edited by Jo Ann Boydston, 1986, *John Dewey The Later Works: 1925-1953*., vol. 9, Carbondale, Southern Illinois University Press.

———., 1935, “Liberalism and Social Action”, Edited by Jo Ann Boydston, 1987, *John Dewey The Later Works: 1925-1953*., vol. 11, Carbondale, Southern Illinois University Press.

Dykhuizen, George., 1973, *The Life and Mind of John Dewey*., Introd by Harold Taylor, Edited by Jo Ann Boydston, Carbondale, Southern Illinois University Press, 三浦典郎・石田理訳，1977，『ジョン・デューイの生涯と思想』，清水弘文堂.

藤竹暁，1990，「清水幾太郎の業績とその着想」，日本社会学会『社会学評論』第160号.

河村望，1990，「知識社会学の課題」，日本社会学会『社会学評論』No. 160.

———，1992，「祭りと共同体の文化統合」，東京都立大学都市研究センター『総合都市研究』第46号.

———，1995，『人間性と行為』（『デューイ＝ミード著作集３』，人間の科学社）.

———，2002，『自由と文化・共同の信仰』（『デューイ＝ミード著作集11』，人間の科学社）.

河村望・石毛聖子，1993，「戦後日本におけるプラグマティズムの受容過程」，日本社会学史学会『社会

学史研究』第15号.
北河賢三, 2003,『戦争と知識人』, 山川出版社.
村井則夫, 2009,「可能性としての人文主義: グラッシとアウエルバッハにおける修辞学的・文献学的思考」, 岩波書店『思想』2009年第７号.
西田幾多郎, 1936a,「論理と生命」(『西田幾多郎全集』第８巻, 岩波書店, 2003, 7-100).
———, 1936b,「ヒューマニズムの現代的意義」(『西田幾多郎全集』第24巻, 岩波書店, 2009, 130-139).
小熊英二, 2003,『清水幾太郎』, 御茶の水書房.
斉藤渉, 2009,「新人文主義」, 岩波書店『思想』2009年第７号.
Sartre, Jean-Paul., 1946, *L'existentialisme est un Humanisme.*, Paris, Gallimard, 伊吹武彦訳, 1955,『実存主義とは何か: 実存主義とはヒューマニズムである』(サルトル全集第13巻), 人文書院.
清水幾太郎, 1935,『社会と個人——社会学成立史——上巻』(『清水幾太郎著作集』第１巻, 239-514).
———, 1937a,『人間の世界』(『清水幾太郎著作集』第２巻, 265-381).
———, 1937b,『青年の世界』(『清水幾太郎著作集』第２巻, 131-264).
———, 1938,『生の論理』, 三笠書房.
———, 1940,『常識の名に於いて』(『清水幾太郎著作集』第４巻, 3-173).
———, 1943,「現実の再建」(『清水幾太郎著作集』第６巻, 271-336).
———, 1945,「三木清」(改造社,『文藝』1945年第２巻11号, のち『近代作家追悼文集成』, ゆまに書房に再録).
———, 1946,『民主主義の哲学』(『清水幾太郎著作集』第６巻, 3-135).
———, 1947,「プラグマティズム概論」(清水幾太郎, 久野収, 1947,『プラグマティズムⅠ　概論・論理学』, 1-49, 白日書院).
———, 1948,『社会学講義』(『清水幾太郎著作集』第７巻).
———, 1949,『私の読書と人生』(『清水幾太郎著作集』第６巻, 359-483).
———, 1957,「デューウィの思想」(『清水幾太郎著作集』第18巻, 380-416).
———, 1959,『社会学入門』, 光文社（のち, 潮出版社, 1970).
———, 1970,「コントとスペンサー」(『清水幾太郎著作集』第18巻, 222-267).
———, 1975,『わが人生の断片』(『清水幾太郎著作集』第14巻).
———, 1976,『この歳月』(『清水幾太郎著作集』第15巻).
———, 1978,『オーギュスト・コント』(『清水幾太郎著作集』第18巻, 3-175).
———, 1986,『私の社会学者たち』(『清水幾太郎著作集』第18巻, 177-420).
清水幾太郎, 高橋徹, 1970,「社会学における歴史と人間」(清水幾太郎責任編集, 1970, 世界の名著第36巻『コント　スペンサー』付録, 中央公論社).
清水幾太郎, 上山春平, 1968,「わがプラグマティズム体験」(上山春平責任編集, 1968, 世界の名著第48巻『パース　ジェイムズ　デューイ』付録, 中央公論社).
清水禮子, 1992,『清水幾太郎著作集』第２巻解題, 講談社.
Simmel, Georg., 1892, *Die Probleme der Geschichtsphilosophie. Eine Erkenntnistheoretische Studie.*, 5. Aufl., Munchen, Duncker & Humblot, 1923, 生松敬三・亀尾利夫訳, 1977,『歴史哲学の諸問題』(『ジンメル著作集１』), 白水社.
———., 1917, *Grundfragen der Soziolodie: Individuum und Cesellschaft.*, Sammlung Goschen, Berlin und Leipzig, Walter de Gruyter, 清水幾太郎訳, 1979,『社会学の根本問題』, 岩波書店.